

# 地方都市魚津における駅周辺のまちづくり

## 新・旧市街地の岐路

阿久井 康平  
KOHAI AKUHI

### 1. はじめに

「駅は都市の顔・玄関口」といった言葉をよく耳にするのではないか。本稿では、地方都市魚津にフォーカスを当て、とりわけ駅周辺で現在進められているまちづくりやその取り組みについて触れていきたい。

鉄道で高岡から約40分（富山から約25分）、風光明媚な山海、田園風景を眺めながら魚津のまちに辿り着く。魚津市は、富山県東部の新川地方に位置する人口約4万2千人の中核都市である。市内には、あいの風富山鉄道の魚津駅をはじめ、富山地方鉄道の新魚津駅、電鉄魚津駅、西魚津駅、経田駅の5つの鉄道駅、北陸の重要幹線である北陸自動車道、国道8号などが走り、県内の主要都市と結ばれている。

魚津市の都市構造は、主に魚津駅・新魚津駅周辺において1960年代に開発された新市街地、そして魚津城跡を中心とした電鉄魚津駅周辺の旧市街地を中心に成立

してきた背景がある。

現在、わが国の多くの都市、特に地方都市における人口減少問題が顕著となっているが、魚津市もまた同様の問題に直面している。図1のように、2010年（平成22年）から2018年（平成30年）にかけた人口増減率をみると、ほとんどの町丁目で人口減少が際立つ。特に、新・旧市街地の中枢を担う駅周辺において、人口減少が如実に表れていると言えよう。一方、高速道路や主要幹線道路付近においては、人口増加が見られる地域もみられ、依然とした自動車依存の高さも伺える。また、図2のように、魚津市の人口密度は、魚津駅・新魚津駅周辺の新市街地、電鉄魚津駅周辺の旧市街地で人口集中地区を形成していることが分かる。ひと、環境にやさしい都市づくりの必要性、都市財政の圧迫などといった背景のもと、「まち空間の創造と再生」を考える上で、駅周辺の地域構想は今後大きな役割を担うものとなるであろう。

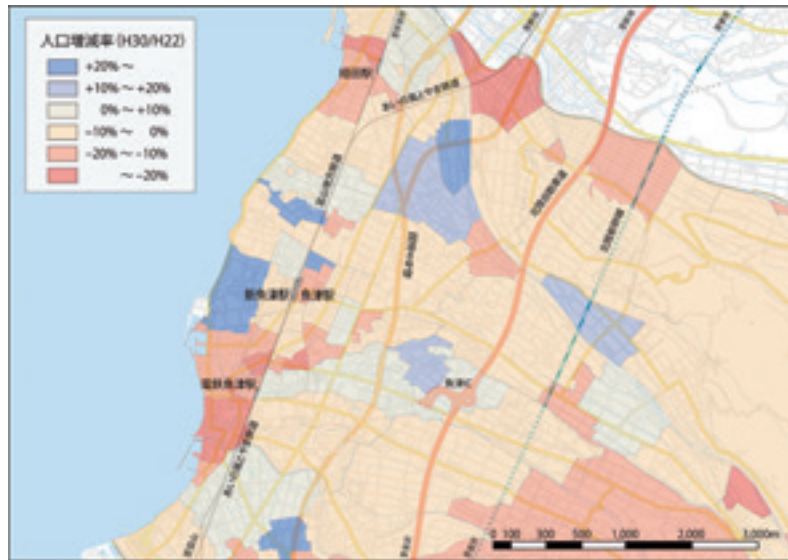


図1：魚津市中心市街地の人口増減率（2018年／2010年比）  
（魚津市資料（＊1・2）をもとに筆者作成）

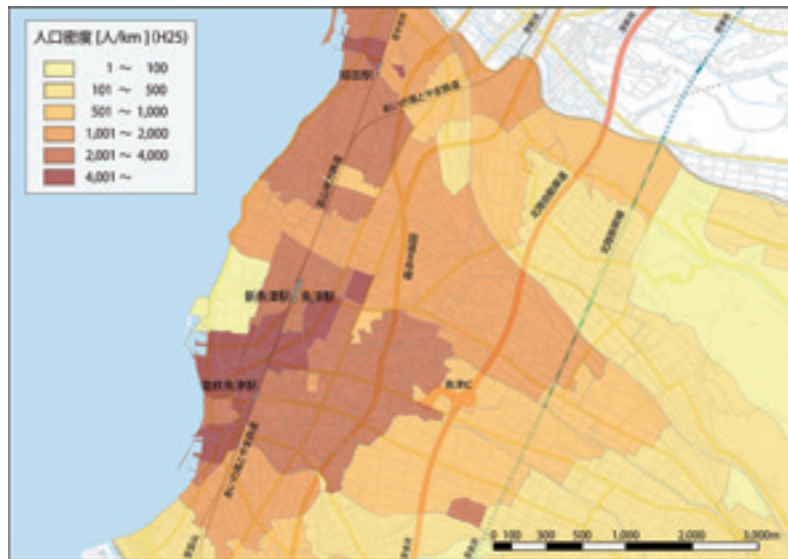


図2：魚津市中心市街地の人口密度（2010年）  
（魚津市資料（＊3）をもとに筆者作成）

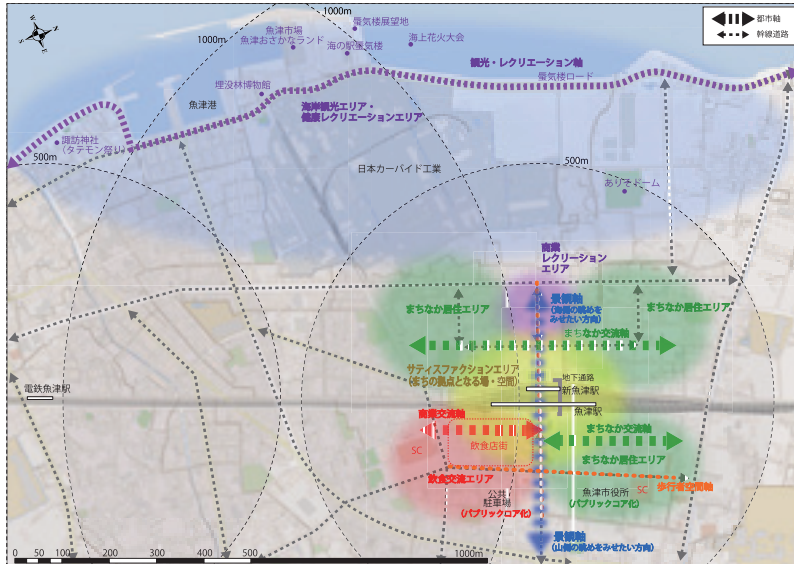


図3：魚津駅・新魚津駅周辺まちづくり協議会で提示された将来像の都市軸・ゾーニング（魚津市資料（※8））



図4：魚津都市計画用途地域図（※9）



写真1：魚津駅から東側（山側）を望む（魚津市提供）

2. 新市街地魚津駅・新魚津駅周辺のまちづくり

魚津をはじめて訪れたとき、山をアイストッブとしたヴィスタに圧倒された景観体験を思い出す。駅を降りてすぐ眼前に望む立山連峰は、富山市などから望む形象と違った景観を愉しむことができる（写真1）。対して、新魚津駅西側から海岸線までの距離は1kmにも満たない。これほどまでに自然資源との関係がコンパクトな都市は全国でも類をみないものではないか。

新市街地の形成過程を顧みると、魚津駅前（釈迦堂地区）は、1955年（昭和30年）頃まで駅正面以外は周囲に水田が広がり、約30戸の兼業農家がある集落であった（※4）という記録が確認できる。また、現在の魚津駅東側の街路は、1963年（昭和38年）4月から1970年（昭和45年）3月にかけて区画整理され（※5・6）、さらに、魚津駅西側については、1981年（昭和56年）度から区画整理され、1995年（平成7年）11月に完了した（※7）という記録が確認できる。

魚津駅と新魚津駅は、あいの風とやま鉄道と富山地方鉄道が並走し、相互乗り換えが可能である。これら2駅が旧JＲ貨物跡地を挟むような空間となっている。

この魚津駅・新魚津駅を核として、「公共交通の便利





写真2：埋没林博物館（魚津市観光協会HP（※10））



写真3：たてもん祭り



写真4：しんきろうロード

性向上」「賑わいあるまちづくり」の両立を目的としたまちづくり構想の策定が進められている。このまちづくり構想にあたり、2017年（平成29年）8月から産官学での魚津駅・新魚津駅周辺まちづくり協議会（以下…協議会）が立ち上がり、地域から求められる期待も大きい。

これまでに協議会で導出された意見をまとめると、大きく3つに体系化できる。一つ目は、駅周辺空間の再編にあたって、気軽に鉄道横断が可能であり、駅東側（山側）

と駅西側（海側）がつながった空間デザインを形成することで地域のアイデンティティが地域内外に向けて発信されるまち。二つ目は、駅から250m徒歩圏内では、一通りの生活機能を拡充し、自動車に依存しなくても歩いて暮らせるエリア、さらにこのエリアを訪ればいつでも誰でも交流が楽しめるまち。三つ目は、駅から広がるネットワークとして、市内各地と駅が自転車や小型・自動運転モビリティを含む様々な移動手段がシームレスに

つながり、駅周辺の利便性を市民が享受できる。また、海側の観光コンテンツとのアクセス改善により広域からの来訪の増加も促進させ、広域交通ネットワークとの連携を充実させるまちである。図3のように協議会では、これらの意見を踏まえて、将来像の素案策定を行っている。

図4の駅周辺の用途地帯をみると、対象エリアの多くを占める商業地帯をはじめ、住居（専用）地帯であることが分かる。駅周辺まちづくりの構想に当たっては、これらの特性を踏まえるとともに、今後検討が必要となる居住誘導区域、都市機能誘導区域、誘導すべき都市施設などを勘案した立地適正化計画との連動を図りながら、戦略的に考究していくことが求められる。

ここでは、現在進められている魚津駅・新魚津駅周辺のまちづくり構想の都市軸、ゾーニングについて順を追ってみていきたい。

都市軸については、まず冒頭で述べた魚津の都市構造が形成する山側のヴィスタ、海側の地域資源といった固有のポテンシャルをつなぐ都市軸を景観軸として位置づけている。現状の駅空間に着目すると、まちの東側と西側は地下自由通路を利用することによって移動可能な一方で、空間的、視覚的にシームレスにつながっていると

は言い難い。つまり、言い換えれば駅空間そのものがまちの分断要因にもなっている。まちの連続性を確保しつつ、今後の将来像を描いていく上で、この景観軸が主導的な役割を担っていくものとして期待されている。

商業交流軸は、現状の飲食店街や観光案内所に加え、今後拡充すべき商業施設や機能をつなぎ、商業交流や賑わいの活性化を図る都市軸として位置づけている。例えば、商業交流軸と景観軸が交わるエリアでは、オープンテラスやオープンカフェなど、魚津特有の眺望や資源を活用した商業展開の可能性も見出すことができるのではない。

観光レクリエーション軸は、海岸沿いの「埋没林博物館（写真2）」「海の駅蜃気楼」「ありそドーム」「魚津市場おさかなランド」といった主要な観光施設、ユネスコ無形文化遺産・国重要無形民俗文化財・県有形民俗文化財指定の「たてもん祭り（写真3）」「海上花火大会」、「しんきろうロード（写真4）」などの観光資源をネットワーク化した都市軸として位置づけている。海側の景観を見せたい方向、景観を感じられる景観軸から観光レクリエーション軸へといざなうように、明解かつシームレスに都市軸を連動させることもまちづくり構想を牽引する一つ

の鍵となってくるであろう。

まちなか交流軸は、主要な公共・公益施設や生活拠点を結ぶ都市軸として位置づけ、駅空間の再編や景観軸と連動させるとともに、駅東西空間の連続性を確保することで、西側エリアの居住誘導の促進にもつなげることが期待されている。

歩行者空間軸は、地域居住者のウォーキング、観光者・来訪者の観光やまちあるきなど、歩行者優先の道路空間として再編し、オープンカフェやマルシェなど、楽しく賑わいある広場のような歩行者空間を形成するものとして位置づけられている。この歩行者空間軸は、周辺エリアにも足を延ばすきっかけとなる空間としての役割を担うことも期待されている。駅空間の再編により、駅東西空間をつなぐ連続性ある歩行者空間軸を形成することも可能となるであろう。距離と時間感覚の関係で言えば、徒歩10分で概ね800mであり、駅から海までの圏域が概ねこういった条件下にあることも分かる。景観軸との連動を図るなど、健康増進につながるような歩行者空間軸の形成も期待できる。

次にゾーニングについて話を移す。まず、サテイスファクションエリアは、駅周辺における既存の公共施設

のリフレッシュを念頭に置き、そのポテンシャルを最大限に発揮させて利用環境の改善を図り、広域公共交通の連携充実も促進しながら、駅利用者の満足度を向上させるエリアとして位置づけている。また、駅空間や両駅の前広場を中心に交流・交通機能を充実させるとともに、魚津の玄関口として地域住民や来訪者との多様な交流、世代をつなぐまちの拠点づくりが期待されている。

まちなか居住エリアは、各エリアに隣接し、まちなかでの生活において利便性を高めるエリアとして位置づけられている。駅東側にある公園や行政機関を「パブリックコア」として位置づけ、魚津市庁舎の建替え（2023年度完成予定<sup>(\*)</sup>）に伴って公共施設の複合集約化を行うなど、行政サービスの一元化によるワンストップサービスの実現、公共サービスの充実、まちなか居住環境向上を図ることで、居住誘導促進を図ることも期待されている。他方で、都市部のグリーン帯となる緑地公園「パークコア」の可能性も考えられており、地域住民をはじめとする憩いの場やイベント広場、さらには来訪者からも親しまれるまちなか緑地公園としての役割を担うなど、豊かな住環境形成に資することが求められる。

商業交流エリアは、地域住民はもとより交流人口の誘

導も見据えながら、昼夜間わない飲食店街、魅力的な商業・業務・宿泊施設などが連携・競争しながら活性化できるような必要な支援を充実させていくエリアとして位置づけられている。

海岸観光エリア・健康レクリエーションエリアは、多様な自然・地域資源が集積するエリアであり、前述のとおり駅周辺から1kmにも満たない位置関係にある。地域

住民のみならず来訪者の拡充を狙ったサイン計画・デザイン、沿道緑化による街路景観の形成なども一つの手掛かりになるのではないか。

商業レクリエーションエリアは、海岸観光エリア・健康レクリエーションエリアとまちなか居住エリアの中間領域のエリアとして位置づけられている。まちなか居住者をはじめとする地域住民や、観光者をはじめとする来



図5：魚津市火災復興土地整理予想図（＊12）



写真5：竣工後の中央通り商店街（1959年頃）（＊13）





写真6：現在の中央通り商店街



写真7：中央通り商店街での賑わい（1959年頃）（＊14）

訪者の賑わいを生み出すような商業・レクリエーション施設の展開を担い、魅力ある土地利用の展開が期待されている。一方で、現在の用途地域が工業地域ということに加えて、海を感じにくい空間になっていることは否めない。そのため、海を感じることのできる空間の設え、海に向かうアプローチ形成など、まちの印象を変えるトリガーとしての役割を果たすことも期待される。

### 3. 旧市街地電鉄魚津駅周辺のまちづくり

新魚津駅から南に一駅隣り、距離にして概ね1km離れたところに電鉄魚津駅がある。電鉄魚津駅周辺は、魚津駅・新魚津駅を核とした新市街地に対して旧市街地として位置づけられる。電鉄魚津駅を降りるとすぐに、アーケードのある商店街の街並みに出会う。一帯の市街地は江戸期における町人街の形成に遡り、大正期から昭和初期にかけて市街地が拡大してきた。商店街の中枢を成す中央通り名店街に加え、駅前につながる新宿通り、銀座通り、文化町通りといった市街地の中心的繁華街を形成してきた。このうち、1956年（昭和31年）9月に発生した魚津大火を契機に、中央通り名店街を主とする区画の商店街が防火建築帯として改良されることとなった。

中央通りの防火建築帯は、図5に示す火災復興土地区画整理による道路拡幅と連動、1952年（昭和27年）5月に施行された耐火建築促進法に基づき、防火建築帯造成事業を通じて構築された。

当時のわが国において、都市不燃化運動が進んでいた背景もあり、防火建築帯の動きは鳥取市若桜街道（1952年）における防火建築帯の指定を皮切りに、沼津市アーケード名店街（1953年）、宇都宮市バンパビル、そして魚津市中央通りなどをはじめとする地方都市の多くの商店街に大きな影響を与えることとなった。

魚津市中央通りの防火建築帯の設計は、日本不燃建築研究所の今泉善一（＊15）であることが明らかとなっている。そのデザインに着目すると、写真5のように煉瓦タイルによる水平方向の連続性を強調したファサードに加え、垂直方向のRCスリット、屋上にみられる千鳥状の手すりなど、きめ細やかなディテールまで配慮されていることが分かる。簡素なデザインを基本としながらも、その設計思想には新たな時代を見据えた街並み、地域景観の形成への眼差しがあったと言えるのではないか。

わが国の防火建築帯について言えば、その多くが老朽化等の問題を抱え、現在次々と撤去・解体が進められて

いるような状況下にある。時を経た今、魚津市中央通り商店街の防火建築帯は、その一部で増改築が見られるものの、写真6のように当時の面影が今も色濃く残る極めて希少な事例となっている。屋上からは豊かな山海が一望でき、先人たちが見た風景の共有にも思いを馳せることができるとともに、その空間利用にも想像が掻き立てられる。

中央通り商店街については、かつては地域の買物客、寺院参拝客が多く来訪、客足を集めるなど市内でも屈指の賑わいの場となっていたようである。写真7は1959年頃の中央通り商店街でのパレードの様子であるが、商店街前面のみならず、防火建築帯の内部、屋上までたくさんの人だかりで賑わっている様子が分かる。しかし、近年においては空き店舗、閉店する店舗が目立ち、シャッター街化の進行という課題に直面しているのも現状である。

こうした戦後建築の歴史的資源としての意義や価値の発掘・共有に関する調査研究、知見を活用した地域の将来像の提案が神奈川大学の取り組みによって継続的に行われている。

また、平成30年度より、富山大学都市デザイン学部



写真8：学生のフィールドワークの様子



写真9：地域と学生の意見交換



写真10：防火建築帯のリノベーション事例「藤吉」



写真11：防火建築帯のリノベーション事例「bel tempo」

都市・交通デザイン学科も商店街の課題解決に向けた取り組みへの参画機会を頂き、道路空間の再編、商業・建築群空間の再編、エリアマネジメント・イベントといった観点から、学生が主体となり課題や魅力の抽出・体系化、将来ビジョンに向けたフィールドワークや議論を行っているところでもある（写真8・9）。

近年の中央通り商店街を取り巻く動きとして、1998年（1999年（平成10年）平成11年）の空き店舗を活用したイベントホルの設置・活用に始まり、2001年（平成13年）の空き店舗を活用したチャレンジショップ支援事業などの取り組みも実施されてきた。同事業を活用してこれまで全10店舗の出店があり、このうち8店舗が中央通り商店街で開業されている。2012年（平成24年）にはこだわりの地産食材販売、手作り惣菜のテイクアウト、ランチやディナーを提供するカフェが一体となった「藤吉（写真10）」が「がんばる商店街支援事業費補助金」、2016年（平成28年）にはコワーキングスペース「machi-o」が「まちなか開業促進物件整備事業費補助金」といった富山県と魚津市による協調補助金の整備支援を受けて開業している。また、2018年（平成30年）9月には、地産食材等を使用したお菓子屋「bel tempo（写真11）」が新

たに魚津市の助成を受けて開業するなど、防火建築帯をリノベーションした若手出店者も増加しており、商店街活性化に新たな潮流が生まれている。

さらに、2018年（平成30年）3月には、まちづくりプロデュースFOCUSが主催となった「防火建築帯FES（写真12・13）」が開催されるなど、商店街の賑わい創出、防火建築帯の認知度向上にもつながっている。

#### 4. 駅周辺まちづくりを通じた新市街地と旧市街地の岐路

本稿では、地方都市魚津における駅周辺のまちづくりやその取り組みについて論じてきた。新市街地・旧市街地ともに、次代の魚津の顔・玄関口を担う駅周辺を核にまちづくりの新たな潮流が生まれはじめている。「まち空間の創造と再生」を考えるにあたって、とりわけ地方都市が抱える課題は大きく、岐路に立たされている。中長期の視点で地域の将来ビジョンを明確にし、共有し、一歩ずつ具現化していくことが重要となる。そのためには、これからの時代に求められるライフスタイルを丁寧に捉えることも求められる。日常のライフスタイル、加えて魚津だからこそできる、魚津でしかない目的に向かう手段を吟味していく必要がある。商店街では、事



写真12：防火建築帯FESの様子



写真13：防火建築帯FESの様子

業や出店者が介入しやすい環境を支える仕組みづくりや充実化も一つの課題となる。また、地域として活性化を図るためには、新市街地と旧市街地をハード面、ソフト面で連動させる施策も重要となってくるであろう。いずれにしても、「出来るかどうか」を問うのではなく、「どのようにしたら出来るか」を考えることが重要なのではない。豊かで幸せな生活とは何か。あるべき目的の本質に立ち返りながら、これからのまちづくりについて考え続けていきたい。

#### 【註釈】

- \*1 魚津市「行政区別人口統計表」（2018年9月） <http://www.city.uozu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=551>（アクセス日：2018年9月13日）
- \*2 魚津市「行政区別人口統計表」（2010年9月） <http://www.city.uozu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=551>（アクセス日：2018年9月13日）
- \*3 魚津市編（2013）「1. 人口、人口分布図（小地域）」『平成25年度魚津市都市計画基礎調査報告書』魚津市。
- \*4 魚津市史編纂委員会編（2012）『魚津市史 続巻 現代編』魚

津市教育委員会 282頁。

- \*5 魚津市史編纂委員会編（2012）『図説 魚津の歴史』魚津市教育委員会、280頁。

\*6 『魚津市史 続巻 現代編』、139・140頁。

\*7 『魚津市史 続巻 現代編』、146・147頁。

\*8 魚津市（2018）「魚津駅・新魚津駅周辺まちづくり協議会資料」

\*9 魚津市「魚津都市計画用途地域図」 <http://www.city.uozu.toyama.jp/attach/EDIT/026/026839.pdf>（アクセス日：2018年9月13日）

\*10 魚津市観光協会 <http://www.uozu-kankei.jp/?p=3685>（アクセス日：2018年9月13日）

\*11 魚津市・魚津市公共施設再編方針、2014. <http://www.city.uozu.toyama.jp/attach/EDIT/035/035207.pdf>（アクセス日：2018年9月13日）

\*12 不燃建築研究会編（1959）『燃えない商店建築図集』理工学社。

\*13 不燃建築研究会編、前掲書。

\*14 不燃建築研究会編、前掲書。

\*15 BA編集部編（2017）『BA／横浜防火建築研究』10＋11合併号、神奈川大学工学部建築学科中井研究室、77頁（BA特別号 魚津防火建築帯）。